第１学年　生活科の実践

１　単元名　しあわせかぞく　大さくせん

２　単元目標

家族のことや自分でできることなどについて考え、家族の大切さや自分が家族によって支えられていることに気付き、家庭生活においてそれぞれの果たしている仕事や役割の価値、家族の温かさ、家族一人ひとりの良さなどが分かる。そして、家族の一員として自分の役割を積極的に果たすことが進んでできるようにする。

３　ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

単元と指導

①単元について

本単元は、学習指導要領の内容（２）「家庭生活を支えている家族のことや自分でできることなどについて考え、自分の役割を積極的に果たすとともに、規則正しく健康に気を付けて生活することができるようにする。」に基づいて設定した。

児童にとって家族は、自分を支え、育んでくれる家族がいるところである。そこでは、家族一人ひとりが家庭の内外の仕事や役割を果たすとともに、思いやりや愛情によって支え合い、家庭生活が営まれている。しかし、児童にとってあまりにも身近であるため、その大切さに思い至らないことが多い。また、共働きの家庭が増えたこと、家電などが充実してきたこと・児童自身が塾や習い事で忙しくなったことにより、家族の団欒の時間や、家事をする時間が少なくなってきている。

本単元は、自分たちで調べ、考え、判断し、体験する活動を数多く設定できる素材であると思われる。自分の生活を調べ振り返る・家族の生活を調べる・自分が決めた家事を実際にやってみる・家族からの感想を聞く・友だちと感想を交流するなどの活動を通して、「自分にもできた」「家族のみんなが喜んでくれた」「これからも続けていこう」「もっとできることを増やしていこう」という自信と意欲をもった子どもたち、家庭生活においてそれぞれの果たしている仕事や役割の価値・家庭の温かさ・家族一人ひとりのよさなどが分かり、自分たちの生活をよりよくしていくための積極的な生活態度を育てていくことになるのではないかと考える。

②学習過程と響き合いについて

生活科では、特に子どもの「思い」や「願い」を大切にしながら、具体的な活動や直接体験を中心とした学習活動を工夫していき、子どもが主体的に学習や生活に取り組めるようにしていきたいと考えている。

本単元では、指導計画にあるような具体的な活動や直接体験となる活動を取り入れることにした。

響き合いについては、聞いて欲しいという児童一人ひとりの思いを大切にしながら、話し合いの基礎である、「聞き方」「伝え方」を生活科でも身につけていきたいと考えている。そこで、一人ひとりが自分の思いをもつ・グループの友だちに伝える・学級の全体に伝えるというような段階を踏みながら響き合いを広げていきたい。自信をもって活動できる、話し合いの手順も具体的に示していく必要があると考えている。また、話し合いの問題については、「ひとつに絞ること」と「具体的で分かりやすいもの」を設定していきたい。また、１年では今回の改訂で新設された内容（８）「自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行い、身近な人々とかかわることの楽しさが分かり、進んで交流することができるようにする。」の内容を受け、交流の場を多く設定していきたい。そこでは、言葉を中心にした伝え合う活動を活発に行えるようにするだけではなく、表情やしぐさ、態度などで伝えること

も大切にしていきたい。

本単元の評価規準

ア　生活への関心・意欲・態度	イ　活動や体験についての思考・表現	ウ　身近な環境や自分についての気付き
家庭の生活に関心をもち、進んで家族と関わり、生活を振り返ったり、尋ねたり、実際に家事をしたりしようとしている。	家庭の仕事や自分にできることについて考え、実際に取り組むことができる。	家族の一員として、家族の大切さや自分の役割について気付くとともに、自分の生活は、家族に支えられていることに気付いている。

4　単元指導計画（全１０時間扱い）

学習の流れ	評価の観点・評価方法・〇支援
自分の一日を振り返ろう。② 〇調べた「わたしの１日」を自分のためにやったことと家族のためにやったこととに色分けする。 〇結果を見て、気づいたこと・思ったことを話し合う。	〈関〉自分の一日を調べることに興味を持ち進んで取り組んでいる。 （行動・発言・シート） 〈思・表〉調べたことを、色分けしたり、友だちと考えを交流することができる。 （発言・ワークシート） 〈気〉 自分だけのことをやっていることに気付く。 （発言・ワークシート）
家族のためになることをやってみよう。① 〇　自分がやってみたいと思うことの計画を立てる。 〇　実際に家族のためになることをやってみる。	〈思・表〉取り組んだことを、話・絵・動作などで伝えることができる。 （発言・ワークシート）
家族のためになることをやってみて、思ったことを話し合おう。① 〇自分がやったことを振り返ったり、友だちの発表を聞きながら、さらに自分の家族がにこにこになるためにはどうしたらよいのか話し合う。**（本時）**	〇保護者へ活動の目的と内容を伝え、協力を得る。 〈思・表〉取り組んだことを、話・絵・動作などで伝えることができる。
にこにこかぞく大さくせん② 〇　話し合ったことをもとに、もっと家族がきらきらするための計画を立てる。 〇実際に家庭で取り組む。※１週間～２週間	〇保護者の感想や、他の児童の振り返りを踏まえて次の作戦を考えるよう助言する。
にこにこかぞく大さくせんで取り組んだことを発表しよう④	〈思・表〉　活動の工夫や、思ったこと等を分かり易

○実践したことを伝える方法を考え、準備・練習をする。 ○発表会を開く。 ○家族へ手紙を書く。	く発表することができる。（行動・発言） 〈関〉発表会に積極的に参加しようとしている。 （行動・発言） 〈気〉家族のみんながきらきらするためには、家族のための仕事を進んで行うことや、家族みんなの時間を大切にすることに気づいている。 （ワークシート・発表・手紙） 〈関〉これからも、家族みんながきらきらになれるように進んで行動している。

5　本時について（4/10 時間）

（1）本時目標

自分がやった家族のためになることを振り返ったり、友だちの発表を聞いたりすることを通して、もっと家族がしあわせになるためにはどうしたらよいのかを考えることができる。

（2）本時展開

学習活動	指導上の支援・留意点（評価）
1　自分がやった家族のためになることを振り返る。 ○ 家族がとても喜んでくれた。 ○ 家族に誉められて嬉しかった。 ○ ここは上手にできたと思う。 ○ もっと上手にできるようになりたいな。	・やってみたことのワークシートを見ながら振り返らせる。 ・保護者からの言葉にも着目するよう助言する。 〈気〉自分がやったことで、家族が喜んでくれることに気付くことができる。
2　グループで、自分が家族のためになることをやってみての感想を発表し合う。 ○ ぼくは、皿洗いをしました。 ○ 難しかったです。 ○ 上手にできました。 ○ 家族の人たちに喜んでもらえて嬉しかったな。 ○ これからも続けてと言われたから、続けてみようかな。	・グループでの交流の仕方を具体的に提示する。 提示のしかた：司会者を立て、進行の仕方を「はなしあいのすすめかたカード」で示す。質問の仕方、理由付けのしかたなどは事前に指導しておく。 〈思・表〉分かり易く伝える工夫をすることができる。 ・グループで発表させた後、全体で２～３人発表させる。
3　自分の振り返りや、グループの友だちの発表をもとに、もっと家族がしあわせになるためにはどうしたらよいのかを考える。 ○ もっと上手になるために、家の人にお願いして、コツを教えてもらおう。 ○ 友だちはこんなことをやって家族に喜んでもらっていた。わたしもやってみたいな。 ○ これからも毎日続けたいな。	・全体で数名の児童に言わせた後、一人ひとりに次にやることを紙に書かせるようにする。 ・理由も発表させたり、書かせたりすることで、活動の必要性をはっきり捉えるようにする。 ・全体発表の際には、児童が発言したことを板書で整理し、一人で書く際に参考にできるようにする。 〈思・表〉家族をもっと喜ばせることができることや方法を考えることができる。 〈関・意・態〉「もっとこうしたい」という思いをもって、次の作戦を考えている。

6　実践を終えて

自分の１日の生活を振り返らせた後、実際にやったことを「自分のためにやったこと」と「家族のためにやったこと」に分けさせた。その際、児童は家族のためにやっていることが少ないということに気づき、「家族のためになることをやってみたい。」という思いをもった。その後自分がやってみたいことを決め、計画を立て、実際に家庭で家族のためにできることをやり、感想を書かせた。その感想をもとに活動を振り返ったのが本時である。作戦名の「しあわせかぞく大さくせん」は、児童たちが「いつもお世話をされている自分たちだけど、その自分たちがもっと家族のためになることをやれば、家族みんなの笑顔が増え、幸せになれるのではないか」という思いから、つけられた名前である。

本時の課題は、「自分の振り返りや、グループの友だちの発表をもとに、もっと家族がしあわせになるためにはどうしたらよいのかを考える。」であったが、児童が自分の活動を振り返った際に、「もっとうまくなりたい」「やる回数を増やしたい。」などという思いを持った児童は少ししかいなかった。これは、前時までの話し合いの中で「しあわせに」という言葉の意味が児童の中で明確になっておらず、自分の活動を振り返るときに「家族が喜んだこと」へ目を向ける児童が少なかったためである。しかし、全体発表の場でそのような部分へ目を向けた児童の考えを取り上げると、「自分ももっとこうしたい。」という思いをもった子がたくさん出てきた。その思いからもっと家族が幸せになるための「しあわせかぞく大さくせん２」へとつなげることができた。ただ、次の活動へつながる「どんな活動がもっと家族を幸せにするのか。」という次時の話し合いの中では、同じような考えしか出てこなかった。本時の３の話し合いにもっと時間をかけ、児童一人ひとりのそれぞれの考えを深めることができていれば、より切実感をもって次の活動に臨むことができたのではないかと考える。

本時の話し合いの場面をひびき合いという観点から見ると、まず、グループでの話し合いの場面では、「他の児童が違うことをした」という点にも目を向けさせることも目的であったにも関わらず、同じ活動をした子ばかりが集まったグループがあった。そのようなグループがあった場合に、「同じ活動でも違う方法がある」ということに目を向けさせたり、これから全体での発表があるから、その時に他にどんな活動があったのかもみてみようと声をかけたりする必要があったと感じている。これは、前時までの見とりの際、個人の見取りのみしか行わなかったことが原因である。グループ活動を取り入れる際には、個人としての見とりだけではなく、グループとしての見とりも行い、各グループに対する支援やアドバイスをするべきであり、それがよいひびき合いへとつながると感じた。また、これはグループの話し合いでも全体の話し合いでも言えることであるが、他の児童の活動に興味を持ち、教師が意図している部分に目が向くようにするためには、言葉による発表だけではなく、実演による発表も行うべきであった。特に１年生という発達段階から考えても、実演により視覚に訴える発表方法の方が、よりよいひびき合いにつながると感じた。